

映画『フルーツベール駅で』における間接的差別

竹花 大和* 住田 光子**

The Process of Indirect Discrimination in *Fruitvale Station*

TAKEHANA Yamato and SUMIDA Mitsuko

The purpose of this paper is to consider indirect discrimination in the process of the conflict between a white person and an African-American through a consideration of the image of Oscar Grant III presented in the film, *Fruitvale Station* (2013). In 2020, American citizens were furious about the death of an African-American since they witnessed, through digital recording, the moment when he could not breathe because a white police officer pressed against his neck without reason. This study, in the context of 2020, shows how the final discrimination of the actual shooting Oscar on the Oakland BART platform portrayed in the film can be seen as the tragic result of multiple effects of direct discrimination by his white acquaintance in the state prison, indirect discrimination of the white police officer, and other instances of discrimination.

Key Words: Indirect Discrimination, *Fruitvale Station*, Digital Image, Oscar Grant III

1. はじめに

差別の行為は「直接差別」と「間接差別」に分類されることがあるが、本稿では、どのような場面で黒人に対する、いわゆる「間接的差別」がおこなわれ、なぜ「間接的差別」がなされるにいたったのかというプロセスを考察する。¹ そのひとつの手段として、史実にもとづくアメリカ映画を通してある社会問題に注目する。

「間接差別」の概念について、安西は、ふたつの見解をあげている：①人種、性別などの区別事由を明示しないが差別効果がある場合、間接差別とする。②人種、性別などの区別事由を明示しなくても、人種差別的意図や性差別的意図がある場合は、直接差別ととらえ、差別効果がある場合のうち残余のものにつき間接差別とする。安西は①の定義に従って、間接差別と憲法について論じているが、本稿においても①の定義に従うこととする。¹⁾

2020年5月25日、アメリカ、ミネソタ州ミネアポリスで、白人の警察官に手錠をかけられた黒人男性ジョージ・フロイド (George Perry Floyd Jr. 1973-2020) が首を膝で押さえつけられ死亡する事件が起こった。² それは、8分に及ぶ時間、強く押さえつけられたために息をすることができなかったことによる。この事件は犯罪容疑がかけられた人

間の人権について考えさせる事件であった。事件後、一連の動画(被害者が警官に取り押さえられる映像)がインターネット上で拡散し、テレビの報道では大きなニュースとして全世界に知れ渡った。これをきっかけに黒人による抗議デモがアメリカ各地で広がり、抗議運動は激しさを増した。抗議する市民たちが集い差別の廃止を求めただけでなく、店舗の破壊をおこなった。さらには、ひとびとが高速道路をふさぎ、パトカーを蹴り、窓ガラスを割るという行為へとつながっていった。白人警官による黒人に対する事件はフロイドのケースが初めてではない。だが、この事件が全世界に知れ渡ったことで、2020年の社会の中で黒人差別への問題意識が高まることとなった。

歴史の中で、植民地では17世紀から白人が黒人を奴隷として扱った時代があったように、現代においても暴力で差別をおこなう「直接的差別」は起きている。アメリカでは17世紀から19世紀の始めにかけて奴隷制度が存在していた。そうした時代に比べると、現代では、黒人と白人の身分の違いはない。しかしながら、実際には、白人による、黒人に対する暴力による差別事件が、毎年、報道される。マスコミに頻繁に報道される事件は、暴力を伴うような類の差別事件であろう。それに対して、白人から黒人に対する、理由なき「間接的差別」は、報道ではほとんど取りあげられない。それは、差別が目に見えない部分であり、その理由が妥当でない点に起因するのではないかと想像できるが、そうした差別の側面についても考えていきたい。

原稿受付 令和2年9月30日

*総合理工学科 電気電子システム系 4年

**総合理工学科 機械システム系

以上のことを踏まえ、本稿では、2013年の映画の事例（2009年、プラットフォームで黒人が白人警官に押さえつけられた事件）をもとに、白人による黒人に対する「間接的差別」について考察する。まず、どのような場面で「間接的差別」が起きているのかを考える。さらに、その点を踏まえて、差別の中にどのような「直接的差別」と「間接的差別」の要素があるのかを考え、上記の事例において「間接的差別」が生まれているプロセスを考察していきたい。

2. 作品と事件

2.1 作品内容

2013年に公開されたライアン・クーグラー (Ryan Kyle Coogler 1986-) 監督の映画『フルートベール駅で』(Fruitvale Station 2013)はフィクションだが、実際の事件をもとにしており、ドキュメンタリーの要素が強い映画である。²⁾ 2009年、22歳のオスカー・グラント3世 (Oscar Grant III) が、カリフォルニア州、オークランドのバート (BART ベイエリア高速鉄道) のプラットフォームで警官に射殺された事件の実話をもとに製作された映画である。³⁾ 2009年という年は、バラク・オバマ旧大統領が黒人として初めてアメリカの大統領に就任した年だが (1月20日)、オスカーの事件は、同じ年に起きた事件である (1月1日)。

映画の主人公と、ジョージ・フロイドにはいくつかの共通点があるだろう。ここでは、映画の内容を説明しながら、その被害者である男性の生活環境や過去が、差別を受ける状況につながるのかをみておく。映画の主人公は、黒人のオスカー・グラントであり、オスカーは彼女ソフィーナ (Sophina Mesa) と幼い娘タチアナ (Tatiana) の三人で暮らしている。オスカーはいずれソフィーナと結婚したいと考えているが、そういった余裕もなくパートナーである彼女と同居している。オスカーは22歳で人生を終えるが、カメラはその最後の2日間をとらえることで、オスカーが最後の時間の中で、何を考えながら抜け出すことができない状況に陥ったかを伝えている。

オスカーには、以前、薬物を売っていた暗い過去がある。それは、収入が得られないという当時の状況が関係している。映像には、彼が売人であることを自首した後、2007年サンクエンティン刑務所に服役していた「過去の記憶」が挿入されている。オスカーの母親 (Wanda) は、刑務所での面会の際、オスカーの顔に傷があることを不審に思い、オスカーに対してなぜ傷があるのか、その理由を聞こうとする。だが、オスカーはこたえようとせずに、子ども

(タチアナ) の話に話題を戻してしまう。そこで、母親は息子が傷つく姿をもう見たくないと考え、今回の面会を最後にするのをオスカーに伝える。その一方で、母親は、オスカーの服役をまだ理解していないタチアナが「パパは私といるより休暇が好きなの？」と発言していたこともオスカーに伝える。オスカーは愛する母親に別れ際のハグをもとめるが、母親はそれには応じない。その際に暴れたオスカーは数人の白人の刑務所員に押さえられるというつらい「過去の記憶」である。

こういった苦い過去があるため、オスカーは出所後、もう二度と売人をしないとソフィーナに誓い、新たな決意のもと新しい人生を送ることにしたのだ。皮肉なことに、刑務所で過ごした過去は彼の人生に影を落とし、公共交通機関での射殺事件につながるひとつの要素となる。大晦日の夜、オスカーは、仲間たちとソフィーナを連れて街に出かけるが、新年を祝うひとたちで混雑したバートの列車内で、ケイティ (Katie) から「オスカー」と声をかけられる。この白人女性は、以前、鮮魚売り場で親切にしてくれたオスカーの姿を偶然みかけて、気軽な気持ちで声をかけたにすぎない。しかし、ひとつの空間 (バートの車内) の中で、ベイエリアに住む、「パーマシーア」というタトゥーを持つ黒人男性のオスカーであるということが特定されたことで、過去に面識のある男性との不和と衝突があきらかになる。

車内で、オスカーという名前があがった途端、ある男性がオスカーを殴ろうと襲いかかってきたのだ。その人物は、以前、刑務所の中で、オスカーの母親も密告屋かと言い、オスカーと喧嘩になった大柄の白人男性であった。黒人であることを理由に、相手に対して過剰な嫌悪感を示す人物である。そして、この小さな不和は、満員の車内で男性が殴りあう状況を生み出し、拳銃を携帯した鉄道警察の白人警官が駆けつけるという緊迫した事態に発展する。⁴⁾

オスカーといっしょにいた仲間たちは、みな黒人である。彼らは騒動の中フルートベール駅で下車するが、オスカーはひとりバート車内に残り、警官の手でおろされる。その場で、数人の警官たちに取り押さえられる。だが、オスカーは無罪であることをひしに主張する。にもかかわらず、オスカーはうつ伏せのまま手錠をかけられ、身動きがとれないまま警官の銃で左胸を撃たれた。

オスカーを射殺したのは、若い白人警官である。彼は、発砲後その動揺を抑えきれない。映画のショットは、警官がオスカーを撃った後、自ら口を手で抑え、その瞳孔が開いていることをとらえている。この場面であきらかなのは、彼は、とっさに銃を構えオスカーの胸に発砲したにもかかわらず、発砲後は、撃った行為に驚いていることである。特にこの

場面が尋常でないと思われるのは、撃たれたオスカーは出血し、ぐったりしているにもかかわらず、発砲した警官が両腕に手錠をかけて動けないようにしているところである。その後、オスカーは病院に搬送されるがその命を救うことはかなわず、事件から数時間後、22歳の若さで他界した。この時、残された娘は幼かった（実際のタチアナの年齢は3歳）。

2. 2 事件とその余波

映画の中で、一連の騒動が起きている間、フルートベール駅に一時停車したバートの車内にいたケイティは、警官がオスカー達に暴行する様子を携帯電話のカメラ機能で撮影をしていた。ケイティの行為は、当時、バートに乗り合わせていた市民の行為をあらわしている。それも、ひとりではなく複数のひとびとの行為である。実際に起こった事件（2009年1月1日）では、携帯電話のカメラを使って、フルートベール駅のプラットホームで警官が暴行をはたらいている様子の一部始終を車内から撮影した市民がいた。^v 映画には、冒頭にドキュメンタリーのように、当時の「実際の映像」が挿入されていて、その映像が手ぶれする様子は緊迫した事態を物語っている。映画の中に描写された2009年の事件が後の社会に大きな影響力を持つのは、一般市民の、武器を持たないオスカーがコンクリート上に押さえつけられ、オスカーの言動に怯えた警官によって銃で撃たれる瞬間までの動画がデジタルで残っているからである。

2009年の事件当初、この動画が証拠となり、撃った警官ヨハネス・メイサーリ（Johannes Mehserle）は殺人罪で逮捕された。「AFP BB News」の記事（2009年1月15日付）のによると次のようである。

メイサーリ容疑者は1月7日、バート警察を辞職したが、その数時間後にオークランドで行われた抗議デモでは、参加者らが暴徒化して100人以上の逮捕者を出す事態となっていた。オスカーの家族は、バートを相手取って2500万ドル（約22億円）の損害賠償を求める訴訟を起こした。家族の代理人である弁護士は、容疑者の逮捕について警察を評価したが、「長期にわたるとみられる手続きの最初の1歩にすぎない」と強調した。³⁾

この記事は、事件直後の反響の大きさを物語っている。また、オスカーに共感した市民の多さが窺える。その一方で、記事は、この事件における容疑者の殺意を検証し、バート警察組織の人間の行きすぎた行為を処罰する難しさも示しているだろう。事実、容疑者は、過失致死罪（involuntary manslaughter）

で2年の禁錮刑の判決を受けたにすぎない。

2009年の事件では、市民の抗議として黒人差別に対するデモが広くおこなわれるようになった。アメリカ社会の抱える問題に世界の視線が注がれた。この時、オスカーとおなじくオークランドで育ち、学生時代、その抗議活動や署名活動に参加したひとたちの中に、ライアン・クーグラー監督がいる。^{vi} クーグラー監督が、オスカー身に起きたことをもとに脚本を書き映画化したことは、ひとびとにあらためて肌の色に対するステレオタイプ意識について考えさせることになった。近年の黒人差別を考える上で、非常に重要な事件であるといえるだろう。次の章では『フルートベール駅で』のいくつかのシーンをもとに、差別の種類やその性質について詳しく考察する。

3. その考察

『フルートベール駅で』の中には、オスカーに対する差別の場面がいくつか描かれているが、ここではその中から3つの差別の場面をあげ、資料を踏まえて考察する。

3. 1 刑務所内の差別

1つ目は、オスカーが刑務所にいた際、母親との面会中に白人男性から「おまえの母親か。母親も密告屋か？」と差別的な発言がなされ、彼らが激しい言い争いになった場面である。黒人と白人は肌の色の違いがあるせいで険悪な仲になっている。オスカーが密告屋だと非難されているのは、彼が麻薬の売人であることを警察に自白したからである。白人男性はオスカーが自白したことで、自分や周囲のひとが不利な立場に追い込まれたのかもしれない。

ここでは、ある刑務所での差別の実態報告をもとに、前述の差別について考える。小宮は、イギリスの刑務所における被害者の実態について、次のような調査結果を提示している。1994年、オックスフォード大学犯罪学研究センターが実施した調査である。以下に、[資料1]として、刑務所内での人種差別事件とエスニック集団の対立に関する調査結果の抜粋を記す。⁴⁾

[資料1]

① 受刑者による人種差別事件で最も多かったものは「悪罵」であり、調査前3か月以内に、黒人の17%、アジア人の21%が他の受刑者から人種差別的な悪口を言い立てられたことがあると主張した。しかし、白人で同様の主張をしたのは2%に過ぎなかった。

② 施設職員による人種差別事件で最も多かったものも「悪罵」であり、調査前3か月以内に、黒人の25%、アジア人の23%が職員から人種差別的な悪口を言い立てられたことがあると主張した。しかし、白人で同様の主張をしたのは2%に過ぎなかった。

③ 施設利用などの所内生活に関しても黒人55%、アジア人の49%が人種差別的な取り扱いを受けたことがあると主張した。しかし、白人で同様の主張をしたのは13%に過ぎなかった。黒人が主張した人種差別的取り扱いで多かったものは、売店、捜索、懲罰に関するものであり、アジア人では食事、宗教、売店に関するものが多かった。

④ 人種差別事件に関して、公式に不服申立てがなされたものは、全体の12%に過ぎず、非公式に職員と話し合われたものも、非白人については約半数に過ぎなかった。公式、非公式を問わず、受刑者が人種差別事件を職員に告げない理由としては、「申し立てても何も得るものがない(何の対策もとられない、状況は変わらない)」が最も多く、次いで「職員による報復の回避(トラブルメーカーの烙印を押される恐怖)」が挙げられた。

1994年の調査結果であり、さらには、イギリスの刑務所の調査であるという制約はあるが、[資料1]①②③からは、刑務所内では、白人に比べて、黒人の方が人種差別的な取り扱いや悪口を受ける比率が非常に高いことがあきらかになっている。

映画の中で、白人受刑者から、黒人受刑者オスカーの家族(母親)が密告屋だと侮辱されたことは、[資料1]①他の受刑者から人種差別的な悪口を受ける場合に相当するであろう。映画から、受刑者の黒人は、普段生活しているところではく見えない場所(この場面では刑務所)において、差別をされていることが分かる。周囲のひとびとの中に、肌の色に対するステレオタイプ意識があるのではないだろうか。

また、[資料1]④からは、受刑者が、刑務所内で人種差別事件があったことを刑務所員に伝え公表することは難しいことが窺える。それは、確たる証拠がないためである。

[資料1]③において、刑務所の施設利用の55%の黒人、さらに、アジア人の49%が人種差別的な取り扱いを受けていた。しかしながら、刑務所にいる受刑者が抗議運動を起こすことは難しいと考えら

れる。そのことは、[資料1]④で、受刑者が人種差別事件を報告したことで不利な状況に陥ることを懸念している点にも関係している。この点を踏まえると、ある疑問が起きる。刑務所内では、直接的差別の行為がなされても罪にならないことをひとびとが認識しており、そのために受刑者同士の人種差別事件が多発し、また、刑務所員による受刑者への間接的差別の行為が看過されているのではないだろうか。そのことが差別の実態を悪化させているのではないだろうか。映画では、そういったく不透明な構造が窺えるシーンがある。

刑務所での面会時に、オスカーの母親がオスカーに「その傷はどうしたの?」と尋ねるシーンがある。その発言からは、オスカーは刑務所内で暴力を振るわれていたことがあきらかである。けれども、オスカーは自分の身体になぜ傷があるのかを説明せず、その場ではごまかしていた。傷は受刑者によるものか刑務所員によるものか定かではない。

94年の調査結果を踏まえると、刑務所内では、黒人に対する差別的な取り扱いが日常におこなわれていた現実、さらには、受刑者同士の人種差別などの衝突が日常的に起きていた現実を映画は反映させているのではないかと推測することができるのである。

3. 2 同一の場所における差別

2つ目の場面は、オスカーが周囲に助けを求めた場面である。その時の周囲の冷たい反応について考える。

オスカーが車にガソリンを入れている時に、目の前の道路で犬が車にひかれた。見かねたオスカーは、周囲に助けを求めようと大声で叫ぶ。だが、だれもオスカーを助けなかった。このシーンは、オスカーという青年のやさしい一面をあらわしているが、同時に観ているひとにある問題を考えさせる。オスカーが周囲の助けを求めたにもかかわらず、手を貸すひとがいなかったのは、彼が黒人であることが関係しているのではないだろうか。この場面に関して、人種差別の問題として、誰も近寄らなかった原因を再考したい。山下邦康は、その著書『やっぱり差別が好きなアメリカ人』(2005)で、アメリカの中西部に滞在中、ホテルのプールに入ろうとした時の経験を次のように述べている。

私がプールに入って泳ぎ始めると、今までハシヤギまわっていたオバさんたちが急に静かになり、やがてプールから出ていった。私も中年をすぎて腹も出て不格好な体型だったから、せっかく楽しんでたオバさんたちに悪かったなと思う程度で、その時はさほど気にもかけな

かった。⁵⁾

プールに入ったのは、日本人男性であり、プールから出ていったのは、アメリカ人女性たちである。日本人男性が、異人種の女性から間接的に差別をされていたのである。なお、男性はプールに入る前、プールサイドのスタッフにそれとなくすこし後にしたほうがよいことを助言されている。また、本書では、海ではこのような差別は見受けられないが、プールではこのような差別は日本人や黒人に対して起こりやすいこと、さらには、若い女性ではなく、中高年の女性の方がそのような差別をしやすきことが書かれている。

多くの人種が集まるところではこうした差別が起こることは少なくなったが、プールなどの人が集まる限られた範囲内においては、アジア系人種は白人からの差別を受けやすいのかもしれない。山下の証言から、白人は、黒人だけではなく、異なる人種に対し、人間同士が密接する可能性のある場所において、意識的に差別をしているのではないかと考えられた。

この部分から考えられることが2つある。1つ目は、年齢が高い女性の方が差別の文化が根強く残っていることが考えられる。2つ目は、若い年代の差別は年々減少しているのではないかと考えられる。現代では、黒人の公民権が保障されなかった時代と比較すると、明確な理由による「直接的差別」は減りつつあると考えられる。しかしながら、異人種間で、意識の中にある、相手を排除したいという感情はぬぐえず、そうしたものがわだかまりとなって間接的に差別をおこなう人が依然として多いことも否定できない。

この考察を踏まえて、映画の2つ目の場面に戻る。黒人のオスカーに対して直接的差別をするのではなく、オスカーに近寄らないということは、つまり、罪にはならないものの間接的に差別がおこなわれているように捉えられた。オスカーが助けを求める声をあげても、誰も彼の行動に注意を向けようとしない異様な状況が示されていた。

3. 3 同一空間における差別

「空間」という視点から差別を考察する。^{vi)} 3つ目の場面は、オスカーが新年を祝う花火を見るため外出した帰りである。深夜、オスカーは車内で白人男性と蹴りあい殴りあいになる。この白人男性は、かつて刑務所内でオスカーに喧嘩をしかけた人物である。最終的に、警官が、興奮気味のオスカーに対して暴行を加える。この場面を巡って「空間」における差別の有無を考えたい。

ジェームス・バーダマンは『黒人差別とアメリカ

公民権運動』の中で、1950年代、アメリカにおける人種隔離政策下での白人の黒人に対する意識について次のように述べる。

地方では、優位に立つ白人に対して、黒人が異議を申し立てられる公共の空間や場所はほとんどなかった。しかし都市部で発達した新しい消費文化は、鉄道車両や駅、デパート、ガソリンスタンド、レストラン、映画館など、新たな場所を生み出し、そのような新しい場所では、ジム・クロウ法の「規定」があいまいであり、簡単に個人の判断で強制できるものではなかった。地方では、白人が優位なのは「当然」のことであり、白人の商人は白人の客と同じように黒人にも売ろうなどとは最初から考えていなかったのに対し、都市部では商品やサービスの平等を求める黒人の声が、白人にとって一つの脅威に見えていた。

白人にとってもっとも脅威であったのは、おそらく黒人と一緒に座らなければならない路面電車、列車、バスなどの座席という新しい「空間」であった。⁶⁾

この部分の記述からは、当時、都市部の「乗り物」という空間の中で、白人が黒人からの強いプレッシャーを感じていたこと、同じ空間の中で白人が特別な精神的緊張状態に置かれ黒人と同席することを警戒していたことが窺える。

本書では、1955年当時のアラバマ州モンゴメリーのバスの着席のルールとローザ・パークス (Rosa Louise McCauley Parks 1913-2005) の事件に関して、次のことに言及している。⁷⁾ 1) バスの前席は白人が使い、黒人が使うことが許されなかった。2) 黒人が前席に座ろうとすると運転手によって降ろされた。黒人はバス前方で料金を支払った後、一度下車してバス後方から乗るのが一般的で、支払い後そのまま乗ることが許されなかったバスもあった。3) 黒人女性のパークスは白人に席を譲らなかったため逮捕された。^{vii)} 4) 彼女が警察に逮捕の理由を問うと警官は「規則は規則だ」と答えた。

なお、本書によると、⁸⁾ パークスは、逮捕後、NAACP(全米黒人地位向上協会)にとって好都合な例としてみなされていたが裁判がおこなわれ、^{ix)} 最終的に原告側が勝訴した。マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師 (Martin Luther King Jr. 1929-1968) が一連の差別に対する反対運動を教会でおこない、多数の人を集め、集団として差別問題と戦った。キング牧師は非暴力主義者であり、以後の運動において広く支持を受ける重要な鍵となった。

3つ目の差別場面に示されるように、ローザ・パ

ークスの事件と、映画に描かれるオスカー・グラントの事件では、相似したところが多くみられる。事件の内容は違うが、移動する「空間」である乗り物の中で黒人と白人間の不和が起きる。そこで黒人は一方的に警察に逮捕される。さらに、事件直後、抗議デモが起きる結果となっている。クーグラ監督は映画において、ひとつの「空間」で起きた過去の差別事件を、ひとつの象徴的記号としてみなし、観ているひとがそのことを意識できるように映画作りをしているようにみえる。映画は、キング牧師らが、バスの人種隔離法の違憲判決を勝ち取った歴史を思い起こさせる。そういった歴史を否定するかのように、悲劇は繰り返す。娘がいるのと言い残して動かなくなったオスカーの姿は痛ましく、映像を通して、銃弾に倒れた彼の無念の思いが強調されるのである。

現代では、パークスの生きた1950年代と比べて黒人の公民権が保障され、表面上は差別が撤廃されたものの、黒人と白人が互いに利用する場所において、依然として差別は生じていると考えられる。オスカーの事例が示すように、黒人と白人が衝突すると、まず責任の所在を追及されるのは黒人の方である。そこで、黒人が警官に無実であると訴えるが理解してもらえず、最終的には黒人が警官に殺害されるという事件が毎年のように起こっている。身の回りがある、「空間」での差別は、周囲のひとびとが気づかないうちにも起こっているものだと考えられる。

4. 3つの差別から

映画の中の3つの差別を中心に考察してきたが、これまで述べてきたことは、どの差別の中にも間接的差別の要素が存在するという結果である。『フルートベール駅で』の3つの差別場面では、そのすべての差別に間接的差別の要素が含まれていると考えられる。間接的差別の多さは、差別そのものが人間の心の深いところに根差していて、意識されにくい問題であることの複雑さを物語っている。

刑務所内での差別については、黒人に対する不平等な扱いや暴行は公表されないが、日常的に間接的差別がおこなわれていることが窺える。また、頻繁に異人種間の衝突が起こっており、そうした直接的差別が起こり得る状況が看過されていた。

黒人のオスカー青年の場合、厳しい経済状況が、本人が自由に生活しづらい状況につながっていたが、それだけが問題ではなかった。もっと別のところに問題があって、黒人であるオスカーに対して、周囲のひとびとが偏った見方で黒人の能力や資質、

内面を判断し、理由もなく関与しないという状況が生み出されたと考えられる。そこでは、いわゆる間接的差別が起きていた。

日常生活の中で、黒人が白人に差別される直接の理由がないとしても、無意識の内に心の中のどこか深いところで差別感情が生まれている。特に、乗り物などの「空間」での差別に関しては、黒人と白人が密接して存在する空間において衝突が起きやすい。その瞬間、相手をステレオタイプ化する意識が働き、差別につながっていると思われる。一方的にある人種を疑うという行為は差別意識のあらわれであろう。映画に描写された、射殺という行為において、白人警官が黒人に対して平等に接するべきだと考えていないことは、あきらかである。いつの間にか、異なる肌の色の人間だけを警戒し害を阻止すべく差別する。それこそが最終的に、射殺という安易な行為につながったと考えられる。

歴史の中で、人間の差別の行為を遡ると、17世紀、植民地では主に黒人が法的身分を持っておらず、黒人は働くことに対して「契約」というものが存在していなかったことに関係している。黒人は「奴隷」という身分で、働ける者でさえいれば、誰かれなしに雇われ働くことを強要された。その後、キリスト教徒の白人にも一時的な奴隷制度があったが、ここでは自由の身が許されていた。だが、白人とは異なり、黒人は一生涯奴隷の身分として生きていかなければならないという相違が生まれていた。宗教上の問題や法的な問題において、黒人は差別されることを余儀なくされ、奴隷として従わなくてはならなかった。⁹⁾ 異人種間の主従関係や優越の意識が、差別の根底にあり、それゆえに黒人は白人から直接的差別を受けていたと考えられる。奴隷という身分では、黒人は財産を持たず、人権も与えられていない。ひとつのものとしての価値がそこにはある。

それに対して、現代では、肌の色の違いで人間を差別することは人権侵害の行為となる。今回取り上げた事例では、被害者となった人間に対して、加害者の方に差別感情があると思われる場面が多くみられた。なかには、意識的なものがある一方で、無意識的なものもある。特に、ひとびとが生活している身の回りの小さな出来事や、何気なく発言している内容の中にも、無意識のうちに差別的な言葉や意思が含まれていることに気づかされる。個人と個人の間では意識されていなくても、そこに差別的な行為が含まれていることがあるかもしれない。それは、プールにて、差別を受けた被害者さえも、相手の差別的な行為をさほど気にかけておらず、差別をされたとは認識していなかった事例からも窺える。

オスカーの事例では、ひとりの警官が、容疑がかかった人物に対して、肌の色の違いから無意識の恐

怖を感じたことが、射殺という行為につながっていることも否めない。最悪な結果として、間接的差別によってひとりの人間の生命が損なわれることにつながった。公民権運動の歴史においては、1965年、カリフォルニア州で起きた「ワッツ暴動」をきっかけに、黒人に、犠牲者としてイメージではなく、恩知らずの略奪者としてのイメージが付与されることがあった。¹⁰⁾ 見方を変えると、黒人が、人間の権利に関して多くを求めすぎていると判断する周囲のひとたちの価値観の中にこそ、肌の色に対するステレオタイプ意識があるだろう。その一方で、さらに後の時代になると、1991年、ロサンゼルスでのロドニー・キング(Rodney Glen King)の逮捕事件では、黒人が白人警官に殴り続けられる動画が放映されたことで、市民の抗議としての暴動が起きた。60年代のひとびとの反応とは異なり、90年代では、いくつかの事件を通して、警察の人種プロファイリングの有無が取り沙汰されるようになる。¹¹⁾ 取り締まる側の白人の判断基準にもひとびとの注目が集まるようになる。肌の色だけを理由に、犯人像に一致する人間に容疑がかけられることがあってはならないが、明確な根拠もなく、さらには無意識のうちに、犯罪の有無と肌の色が瞬時に結びつけられるような事件は2000年以降も後を絶たない。

現代では、白人と黒人の間の主従関係はなくなったにもかかわらず、意識の中の差別は続いていて、そうした負の感情によって、日常生活の中で間接的差別がおこなわれていることが分かる。加害者自身もその時の差別感情の所以をたずねられても、答えられないかもしれない。しかしながら、そうした感情こそが、異人種間での衝突や射殺事件につながっている。映画に描かれたオスカー・グラントの事件は、刑務所にいた白人からの直接的差別と現職の白人警官からの間接的差別を始め、いくつもの差別が重なり合って引き起こされた悲劇であるということができよう。

5. まとめ

本稿では、映画『フルートベール駅で』を通して、いわゆる「間接的差別」がなされるにいたるそのプロセスを考察した。現代では、目に見えない差別が日常的に起きている。映画に描かれた、白人警官による黒人の暴行・射殺は、異人種に対する意識的な差別と、その当事者たちの間にも意識されないような、異人種間の複雑な差別感情が重なり合って引き起こされた事件である。その根底には、かつてあったような主従関係の意識がどこかに残っており、ある特定の人種に対する無意識の差別の感情が、ひと

つの行為として顕在化したものであるといえる。ひとつひとつの要素が複雑に作用し、最終的にひとりの人間が追い込まれるという状況につながっている。それは、間接的差別の行為の先に、死があるという恐ろしさを感じさせるものである。映画『フルートベール駅で』は、ある黒人男性の最期の生き方を通して、死の責任の所在を社会に問いかける形で終わっているが、その一方で、一筋の光として、撮影したデジタル映像を通して「理由なき差別」に抗議する力強い市民たちの姿をも描いているのである。

謝 辞

本稿は、津山工業高等専門学校の「全系横断演習Ⅰ(2019年度)」「全系横断演習Ⅱ(2020年度前期)」での異分野横断型学習の成果をまとめたものである。竹花が草稿を書き、住田が指導にあたった。1年半の演習を通して助言を頂いた本校の教員に感謝したい。

参 考 文 献

- 1) 安西文雄：間接差別と憲法，明治大学法科大学院論集，20(2017)1-22.2-3.
- 2) 監督・脚本：ライアン・クーグラー：フルートベール駅で(2013) (制作：ニーナ・ヤン・ボンジョビオ，フォレスト・ウィテカー，出演：マイケル・B・ジョーダン，オクタヴィア・スペンサー，メロニー・ディアス) .
R. Coogler, dir. : *Fruitvale Station*, Screenplay by R. Coogler, Forest Whitaker's Significant Productions (2013), Toho (2014).
- 3) *AFPBB NEWS*：米地下鉄駅で白人警官が黒人男性を射殺、容疑者を殺人で逮捕，2009.1.15, 2020.09.12 <<https://www.afpbb.com/articles/-/2558377>>.
- 4) 小宮信夫：英国の刑務所におけるエスニック問題，犯罪社会学研究 22(1997)2020.9.18 <https://www.jstage.jst.go.jp/article/fjscri/22/0/22_KJ00001702687/pdf/-char/ja>. (R. Burnett and G. Farrell : *Reported and Unreported Racial Incident in Prisons*, U of Oxford Centre for Criminological Research (1994)の報告(翻訳)を含む) .
- 5) 山下邦康：やっぱり差別が好きアメリカ人，経済界(2005)36.
- 6) J・バーダマン：黒人差別とアメリカ公民権運動—名もなき人々の戦いの記録，水谷八也訳，集英社，(2007)58-59.
- 7) J・バーダマン：(2007)61-69.
- 8) J・バーダマン：(2007)70-91.
- 9) J・バーダマン：アメリカ黒人の歴史，森本豊富訳，NHK出版(2011)15-19,39.
- 10) J・バーダマン：(2011)219-20.
- 11) J・バーダマン：(2011)236-39.

注

i 直接差別とは「人種・性別などの差異を基準として取扱の違いを生じさせる」ものと定義され、間接差別とは「区別の基準は一見中立的だが、結果として一定の属性を共有する人々に偏って不利を生じさせるような取扱」として定義されている (iii)。浅倉むつ子「序」・浅倉むつ子、西原博史編著：平等権と社会的排除—人権と差別禁止法理の過去・現在・未来、成文堂、2017 参照。

ii 本稿では、アフリカ系アメリカ人を「黒人」と表記する。それに対して、それ以外のひとひと、白色系、黄色系の人種を「白人」と表記することとする。

iii 映画では、事件で射殺されたオスカー・グラントの名前を主人公の名前として使っている。

iv CNNによると、2009年の事件ではパート警察官が、事件の内部調査に対し偽りの証言をしたことが伝えられている。事件の際、複数の黒人が車両から降ろされ壁に並ばされた。パート警察のアンソニー・ピローン(Anthony Pirone)は、別車両に移動してきたオスカーに気付き、汚い言葉を使ってパートから降りろと命じた。この時、ピローンは、オスカーが鼠径部を蹴ろうとしたため、関わらなければいけないと思ったことを語る。しかし、調査官によって検討された事件のビデオ映像には、オスカー側からの攻撃の事実がないことを、近年公表された2009年の報告書があきらかにしているとCNNは伝える。混乱した緊張状態をつくりだした人物のひとりとして、ピローンの存在が指摘されている。

Dakin Andone and Marlena Baldacci: Officer instigated then lied about actions that led to shooting death of Oscar Grant, report says, *CNN*. 19. May

2019. 19. Sep. 2020 <<https://edition.cnn.com/2019/05/04/us/oscar-grant-shooting-bart-internal-investigation/index.html>>.

v 2009年1月11日付の1分58秒の動画を始めとして、事件の動画が複数、YouTubeに記録されている。取り調べがすむまで一時停車しているパートの車内からホーム側が撮影されているため、車内で話している乗客の声も記録されている。警官がオスカー達に大きな声で命じる様子と、男性を放せとさげふ怒号がとびかい混乱する乗客の様子が映し出されている。1発の銃声が響く。その直後、乗客は大声で抗議しているが、パートの扉は閉まり駅を発車する。動画の中に、他の乗客がデジタルカメラで撮影する手が映っていることから、複数の乗客が事件を撮影していたことが窺える。

vi インタビュー：『フルートベール駅で』ライアン・クーグラー監督が来日、人種問題の難しさに言及、*MOVIE COLLECTION*. 2014. 2. 20. 2020. 9. 18 <<https://www.moviecollection.jp/news/14973/>>.

インタビュー：『フルートベール駅で』ライアン・クーグラー監督インタビュー、*東京女子映画部* 2014. 2. 10. 2020. 9. 18

<https://www.tst-movie.jp/special01/sp29_FruitvareStation_director.html>.

vii ここで扱う「空間」とは、多くの人種が生活の中で利用する公共物の中での空間のことを指す。

viii ローザ・パークスは1955年にアラバマ州モンゴメリーで公営バスの運転手の命令に背いて白人に席を譲るのを拒み、人種分離法違反の容疑で逮捕された。後に、公民権運動の母と慕われた。

ix NAACPとはNational Association for the Advancement of Colored Peopleの略。当時、NAACPは訴訟を視野に、バスの人種差別撤廃をめざすテストケースの原告をさがしていたといわれる(バーダマン、68-69)。